

研究通信

大会特集号

No. 7
1953.11.20

本郷文部省
東京大学文学部
社会科学研究室
社会科学研究室
社会科学研究室

宿題と大会のちち方に關して二つの意見がある。かりに會員A氏とB氏としておきたい。こゝに両氏の意見をかゝげて、會員諸氏のこの兩者についての賛否をおうかぎたいと思う。

A 氏の場合

今年の仙台大会で宿題の共同討議が余り効果的に進行しなかつた事が認められたので、来年度はどうするかについて協議会でも相当問題が生じ、結局決定を見るに至らなかつた。そして研究通信で定めるという争になつたので、その時対立した二説について會員諸兄の賛否を向う争になつた。

全体の傾向としては、農地改革の村落構造に及ぼした影響という今年の課題をもつと深める意味で今年限りの問題としてしまふには惜しいから、この問題を底流として持ち乍ら、もっと問題の焦点をさしぼる方がよいという争になつたが、この焦点を非常にはっきりした一点に集中するか、それとももつと含みを持たせて、余りはっきりしばらぬ方がよいという説と二つになつたわ

けである。後者としては、村研究成後余り時日も経ておらず、各地方に散在する人達に、夫々の問題を持って思い／＼に研究して来た従来の行が／＼が強いので、はっきりした一つの課題に集中してしまふと参加する事が困難な人々もあるのではなかつたかと思ふので、焦点をかなりはっきりさせても、余り厳密に一点に限定しない方がよいのではないかと思ふ意見である。協議会では家族、町村合併、兼*

宿題と大会に関する二つの意見

その角度から研究発表をして討論参加が出来ると思ふ。或は村の指導者の問題に關心を持つ人はその点から参加出来るので、家族の問題は／＼／＼な点から追求され得る。今の所余り狭く焦点を限定すると窮屈になると思ふので含みを残した

はどうかという説があつた。どれも結構であるが、かゝりの含みを持たせて、農地改革に影響された家族の問題を来年度の宿題としたらどうかと思つてゐる。含みを持たせるというのは、例えば兼業農家に關心を持たせることである。しかし、大会のちち方は、必ずしも成功ではなかつた。というのには、報告者の数が多かつたことと、討論が有効でなかつたからである。そこで、私は来年度の大会のちち方について、私見をのべて、會員諸氏の御検討の資

B 氏の場合

せう方がよいと思ふのである。研究発表及討論について、かりに非常に明白に焦点が限定されていたらしても、今の状況では必ずしもうまく展開されないかも知れない。それは研究者の発表は多くの地区で個人的になされ、大会に迄全然個人的な争が多いから、全体としては比較的多岐に問題が提出される傾向である。これは各地区的共同研究が一部をのぞいて成立していないからである。もし将来各地区的共同研究、共同討議が出来ていて、各地区で大会の研究発表者をきめて、大会に臨む事が出来るようになると、大会の運営ははるかに能率的、効果的になるのだと思われ、支部と云わなくても、共同研究のグループとして各地区が大きく活動するようになると思われ、宿題のきめ方にも困難は少くなると思ふので、會員諸兄の御考えを頂きたい。

としたいと思ふ。

その第一点は、報告者の数をもう少し減じるとともに、報告時間を厳守するようにし、討論の時間をなるべく多くすることである。そして、その報告に対する質疑は報告直後すませることとし、総合討論では十分に問題について討議をすることができるようにならねばならぬ。一般に討論のばあいには、細かい質問や技術上の質疑は、個人的にやることにして、総合討論はむしろ人報告後の質疑討論も、共通のテーマに集中するようにすべきである。

第二点は、以上のことと関連するが、共通のテーマについて十分な討議ができて、新しい収穫をえてかえることができるためには、テーマをしばった方がよいと思ふ。テーマをしばるといふことは、一見して参加者が少くなるように思われるが、たとえは、「農地改革による地主権力の変遷」というようにしばるとき、これは、各等階分野から共通的に研究できるし、いろ／＼の村について研究しうるはずである。そうすれば、報告しない人々も自分が調査した村ではこうであった、という形で討論に参加でき、各種の調査が出しあわされて、比較分析が行われ、理論的な収穫をえて会を閉じることができる。本年のような形では、報告大会にはなつても、研究大会にはなりがたい。報告時間を限定して参加者が討議に活発に参加できるように、報告者の報

告主張が明確でなければならぬと同時に、討論すべきテーマも集中できるように限られなければならぬ。

以上の意見には、もちろん短所もあるが、要は、村研の大会が、一般の学会大会のようになるべきでないと思ふれば、多少の欠陥があつても、集つた人たちが有効な発言をしてお互に収穫をわかちあえるようにしたいということである。どうか、忌憚ない御意見をよせたい。

以上A B両氏の意見に対する賛否と同時に、今年度の宿題を何にすべきかの御高見を是非本部までお寄せいただきたい。

研究通信編集委員会

方法主義へ

内藤 莞爾

九州から仙台までの旅は相当なものであつた。しかし報告者の真摯な研究や質問者の熱心な態度を見て、矢張り来てよかつたと思つた。個々の研究報告を離れて、大会全体をふり返つてみた場合、そこには考えてみるものがないとはいへない。特に問題の焦点がいささかボヤけて一つの像を結ばず、何となく *Wangsa* に終つたこととはかえ

すがえすも惜しかった。これは司会者の罪といふのではなく、問題提出の仕方をむつと限定しなかつたところから、或る程度、予想されるものであつたともいえる。けれども、そうした欠点をカバーしてあまりあるものは、農地解放とそれをめぐる諸問題の多様性、またこれへのアプローチの仕方についてさまざまなもののあることを教えられた点である。私はむしろ今度の大会の意義はこの収穫で充分果されていと思つている。祥をぬいだ懇親会の雰囲気も印象に残るものである。

日本社会学会の「農村」の「漁村」の部報告も私はなるべく聴くようにしてみた。これらも含めて、仙台ではいろ／＼なものを教えられたが、また反省させられる点が無いはない。全体的にいって、日本の実証研究はいろいろな問題を捉えて、これを提示することにおいては著しく進歩した。にもかかわらず、その問題はむしろ「对象的」に与えられたものであつて、「方法的」に求められたものでない。つまり方法的には依然として低迷しているといえようである。特に社会学的研究の場合、私はあながち山崩れ地に出掛けるばかりが能くないと思ふ。俗ないい方をすれば、頭を働かせさせずれば問題や対象は幾らでもあろう。もちろん、日本の社会は地域的にも解明されない部分が多いのであるから、前のアプローチを否定すべきではない。私は社

会学が民族学や史学と袂を別つべきことをいふのではない。が、それにもかかわらず社会学の特異性を主張するならば、「対象主義」より「方法主義」にむしろ将来性を認めたいのである。(九州大学)

第二回大会の印象と

若干の希望

山本 登

1. 第一回の大会に出て、「村研」の一番の長所(華関係科学の協同)が、はっきりとでたことが最も印象的。併し他面において、ついうかうかと報告する気持ちになつて了つたために、心理的に消極的になつてしまいました。共同報告をした西田君の如き、冷汗でびっしり。社会学会での報告は「こわくなかつた」(ハ?)が「村研」は「こわかつた」(ハ?)という実感です。だが勉強になりました。
2. 大会の持ち方としては、総会でも意見が出た如く、報告者の教をへらすこと。それにつけても報告者はやはり、もう少し時間の責任をもつことが必要。協同の困難の面がわからず。討論で出た形。これはやはり運営技術と報告者の責任だと思ひます。
3. 宿題。二つの意見が同数といふことは、やはり向蹙としては本年通りがよいといふことかと思ひます。但し大会、研究会においては、ぐつとしばればよい。時間には限度があるから。

うことかと思ひます。但し大会、研究会においては、ぐつとしばればよい。時間には限度があるから。

4. 何はともあれ一番うれしかつたことは、*Informal*な(こころ的)上下関係の欠如していること。「村研」の発展の将来は思ふべし。来年の懇親会は、どこかでアキラをかりて、大いに談じたい気持ちです。少々高くついても、みんな喜んで出すであらう。
5. 向蹙点(Case StudyとMeasurement)とをいかにして調和させてゆくか。各地方村落の比較という場合、どこに共通の次元をみつめるか。第一回の報告に陥する限り、「各々我が道を行く」感じ。「村研」とつての今後の向蹙点ではないであらうか。

6. 運営。有賀・中村・森岡諸先生のチーム、ワークまことに見事。お祭の毒とは存じますが、少くともいま一年、お世話を御願致したいと存じます。
7. 安い会費に充分に飲まして頂きました。東北大学の諸先生の御努力に感謝の言葉もありません。「仙台! 仙台!」なつかしや!へ仙台小娘の一節)
思ひつくすまで。(一九五三・二・二〇)
(大阪市大)



妄言多謝

内山 政照

はじめで社会学会をのぞいた私は、コマ切りの報告と顔見知りの人がいないこととで、さびしい気持ちになつて来た。村研はしかし、一おうまとまった報告をきくことができ、有賀先生始め旧知の方々も若干あつたので、ホツとして救われたような気がした。村研は労働組合のような新鮮な空気にみちていると誰か言つたが、たしかにそういう意気どみと気合とがみなぎっていることも、うれしかつた。

そこで組合費を気どつて感想を二つ三つ、報告の仕方について、「御承知のとおり」といふ調子で、報告の基本モチーフに当るところをとはしてしまい、ネタを並べてあとは天々の「御承知」に従つて解釈してくれ、というのは困る。おはずかしいことだが、実はあまり「御承知」してないからである。もっと率直に照れ臭がらずに、善生流の仮説断を出してほしい。ネタをその焦点にしぼつて欲しい。このためにはしかし、やはり会員お互に「貧しさもの」の自由な交流ができるような、人間関係ができ上ることが前提条件なのであろう。例えば懇親会が前日にもたれるのもその一工夫。

二、独自の方法について、村研はその趣

際として、「村落」を研究対象とする限り、各専門研究者をつむくこととうたっている。しかし、このことはお互の方法の独立性（従って限界）をすく、ということをも意識しないはずである。歴史も経済も社会もゴツタ煮で、「村落」を研究すればよいというのではないはず。社会学者ならばそれなりに独自の、他の研究者にない方法で終始一貫すべきだ。こうした覚悟が十分であつたらうか。（或いはこのことに反対の方もいるであろうが）

「ひとが個性をもつこと深ければ深きほど、眞の己の心持を守り、形づくられる可能性が大きくなる。かゝる基礎なくしてつくられた共同体ありとしても、それは、*community* なものにすぎない。」

最後に、白髪の老先生がたのますく、さかんなエネルギーと、ナイーブな精神は、他の学会に稀稀れ、心あたまる村研の源泉。及び地方の町々に散らばり、仙台上に集まれる研究者のオマケ熱意。これらば私知さ青二才に上つて最大のシツタの報であつた。深し敬意をさしげ度い。

（豊林省農林総合研究所）



村研仙台大印象記

大藪 寿一

有賀先生等より「九州くんだりからわざわざ来たのだから村研第一回大会の印象記を書かないか」とのおさそいを頂いたので遠路はるばる組という唯一の資格で一文を草することになりました。午前午後の研究発表については別途紹介があると思いますので小生はそれ以外のことについて書いてみたいと思います。

まず、今次大会の特色——同時に今後の村研の特色となるでしょうが——について述べてみたいと思います。第一にそれは農村研究の各領域の方々が一堂に会されたことでしょう。経済学者、社会学者、農学者を始め、実務にたずさわっておられる方々研究所の方々等々全く色とりどりで村研の幅の広さを感じさせられました。総合討論会で、高倉氏、森任氏を中心とし、有賀、木下、中村の諸先生を加えての論争の迫力は、その一例を物語っているといえましょう。又、国際基督教大学の *Davis M. Linstrom* 教授が早速かけつけて出席されたことも特筆すべきことでしょう。

特色の第二は、閉会の辞がなかったことでしょう。それは村研の会員が、第一回大会で体験した学問的興奮と会員相互の親密な雰囲気閉会の辞という形式で拭き消し

たくなけいという潜在的総意によるものではなかつたのでしようか。少くとも小生は内容が形式の殻を破つたものであると感じています。

その第三は、懇親会に於て、酒をくみかわしつゝ、極めて長時間に亘つて意見の意見や論争が終始、熱をもつて続けられたことでしょう。（勿論、殆んど大部分の会員が二十三四十分の夜行で帰る都合上、ゆつくり腰を落ちつけていたことも勘定に入れねばなりませんまいが）其他色々ありましたが、紙面の都合で省略致したいと思ひます。たい、以上の事柄から他の研究会、学会にみられない或るものを感じたということ述べたかたたのです。兎角、学問的研究というものは血の通よつていないものの代名詞みたいな言われまますが、村研の場合、何かほんのりしたヒュマンライクなものを感ぜさせられました。土にまみれた所謂「百姓」と直結せねばならぬ農村の研究者にとつて最も大切なものはヒュマンライクな人間性ではないでしょうか。私は大会の雰囲気の中にそれを垣間見たような印象をうけました。

最後のしめくくりとして研究上の問題について意見を簡陳せねばならぬように思ひます。大部分の発表が実証調査に基く得れた研究成果であつたことは申すまでもありません。たゞ私はそれ等の発表を拝聴すると共に後の総合討論会や来年度宿題に關する討論等に関連して、次に掲げる点の考

Heberleの一文を想い出していたといふことまで申し上げたいと思ひます。

“Even regional research must necessarily be oriented towards general social theory and receive its direction from such theory if it is to arouse more than regional interest by contributing to the advancement of our understanding of social life in general.” (Social Forces, October, 1946, 9. 9 «A Sociological Interpretation of Social Change in the South»).

来年度宿題に關する討論の折「向題」は「側」と「向題をひろげる」側との二つの意見が出ていましたが、前者とも趣向する所は同じではないかと思つたのです。

それは農村研究の“Open Roads”を発見したいという気持ちの表裏ではないでしょうか。綜合討論会が何かちぐはぐな討論という印象をうけたのは、諸研究成果が、一つのOpen Roadに収納される方法が未だ明確化されていないからではないでしょうか。ホイットマンの詩にある「さあ行なう！ 大道は私達の前にある！ その足が十分に歩いて見たのだ——私のこの足が十分に試みたのだ」という或る一つのOpen Roadの発見こそ村研に課せられた最大の任務ではないでしょうか。

問題はその辺にあるような気がします。とはいへ実証調査の困難性は逆説的に、や

はり我々がとりあつて居る仕事の地域的時間的な制約の中に棲れわつて居ます。私村研の綜合的力に對して、この困難性をのりこえて Rudolf Heberleの主張するやうな（そして我々もつと）思ひついでいる（た）一つのOpen Roadに つながらず派なとしての確な研究成果を期待してやみません。（熊本短大）

雑感

皆川勇一

村研の大会が終つてからもう一月になる。二日間の社会学大会の後の疲勞にも不拘、報告者の方々が極めて良心的な報告をされ而も有賀先生の司会の許に、終始自由な和やかな空気の下の行われた事は、今思い出しても心算しい気持ちがある。特に大会後の晚餐会には、各人各様のざつぱらんな自己紹介と同時に、会そのもの並びに大会そのものに対する相当忌憚のない意見の持ち出された事は今迄に類例のない事と思つた。そしてあの席上で若干の人々が触れられた様に、あの日の大会の個々の報告がそれぞれ立派なものであつたにも不拘、矢張り宿題として研究通信に福武先生が一応とりまゝとめて居られた様な意見というものが、報告者の方々自身に於て必ずしも明瞭に貫かれて居なかつた様でもあり、そして之が発表後の討論会を舞台に不活発にし、何とな

くあまたらぬものにした一つの原因であつた様に思われるが、勿論之は報告者の方々と並に大会を準備された方々の責任ではなく、寧ろ村研の會員全ての責任であり、寧ろ出席者各人が、あの宿題の線に沿つて自分の考えなり研究なりをまとめる為により一層の準備をして居たならば、あの討論会もより焦点のはっきりした且実り豊かなものになつたであらう事は疑いない。勿論農村改革と村落構造というテーマそのものが甚だ巨大なものであり、會員の方々も、或いは専門を異にし、或いは同じ専門分野にあつても、その研究テーマ、方法、関心等を異にして居る以上、単に問題を整理し討論を有効に進めると言う事も難かしい事には違いないが、斯うした困難については寧ろ大会以前に、宿題並びに大会の持ち方等について、それぞれの方が積極的に意見をよせる事によつてある程度は避けられたのではなからうかと思つた。併し乍ら、研究会発足後而もなく、しかも會員の連絡も研究通信を唯一の媒介機関として利用するより他に道のない様な状況の中で、兎に由全員全てが一室に會して大会を持ち得たと云ふ丈でも大いなる成果であり、特に委員の方々の御苦勞を感謝したい。そして来年度こそは今年の發奮を活かして、より一層意義なまとまりのある会になる事を望んで止まない。そしてその為には単に委員会やその他一部の人々でなく、會員の全てが宿題について考え、それらの意見を發表し

交換し合ひ、それを通して共通の立場を作る事が最も不可欠な前提ではないかと思ふ。私自身之等宿題並びに会の方向等について大して考えもせずには唯漫然と何とはなしの期待にすがつていたもの一人として、甚だけたい話なのですが、自分自身に対する自己批判をまず第一に念頭に置きつつ、感想の一端を綴つて見ました。

(人口問題研究所)

第二回村研大会を顧みて

原 宏

仙台で開催された第一回村研大会を無事終えて色々考えさせられる事があつたりと思いつくまゝに述べてみよう。

一、地方にいる者——特に私のように青年者の高校教師を余儀なくせられてゐる者——にとつては年に一度の大会は絶好のチャンスであるから、社会学会大会に引續いて持つとしても、社会学会の農村部会の延長であつて賣いたくない。そのためには会の持ち方、進め方に多少工夫を欲しいものだ。その意味に於て討論会に重点を置くようにしたい。即ち共同課題の下に数名に研究発表をお願いし、ヒナ壇式の討論会(往々にして報告者への質問になりがちであるので)をやめて *theme place* で大円卓式の *symposium* 形式で行い、司会者は共同

課題の *topic* の順に一般會員から質疑をうけたり、報告者から或は一般會員から意見や提案をうける。報告者と一般會員、報告者と報告者、一般會員相互間の批判、討論の *circulation* とはかかる。

二、それには一般會員が所謂聴衆にならないように *theme* を *standards* するだけなく、*topic* としても *research methods*、*logic* の *standards* も考えなくてはならない。かつて「研究通信」には宿題の *item* は経過と共に流されたが、私の言いたいことはむしろ *operator* にとつても一般會員にとつても *operator* の *standards*、*item* と同じことも望みたいのである。つまり *operator* の必ず用いなければならぬ *diagram*、ふれねばならぬ *analysis point*、さういつたものの *minimum* を決めるべきだと思ふ。 *operation* としての実績をあげるためには少々窮屈かも知れないが、村研としてはさうありたい。九学会の大会のようにはありたくない。

三、共同課題については各専門分野に立つ問題点、盲点を考えると共に各地域の特殊相を全體的な普遍相と対比して考えること。さういつた意味で私は宮崎大学の高倉氏のいわれた「兼業農家」の問題をあげたい。特に都市近郊村落においては所謂「雇工農家」の問題があるが、かつては主として農業経営分野の人々によつて幾多のすぐれた研究業績が報告されているが、殆んど

第二次大戦前か戦時中のものである。然るにこの問題は戦後の今日と雖も都市における近代産業のシステムの変貌と共に再び新たな焦点を示しつつあるといわねばならない。来年の宿題には困難であれば、早晚取上げねばならない問題として皆さんの熱意を乞う。新刊書「日本農業の社会学——兼業農家の実証的分析——」四宮恭二著を先日来ひもといっているがソシオロジー・プロパーであるか否かは別として村研の盲点とならねばよいかと、ひとり勝手な焦り心から考えている。

しかし村研草創の大会としては甚だ有意味であつたし、松島見学をしないで、さい果の筑紫に帰つても悔はなかつた。村研こそ年令をこえて、分野をこえて村場を愛する人々の集いであることを肝に銘じた。(福岡県立東筑高校)

歸台以後

——第一回村研大会に寄す——

高倉 又二

村研大会から歸つて既に二週向になるが、率直に言つて、それが爾来の自分の研究生活態度に投じた波紋の甚だがり並に深さの測定に苦しんでいる。その測定は歸る回、第3回の大会と重ねてはじめて確認するべき性質のものである。然し自分の氣持が今

その第2回を今日に、第3回を来月にと叫び求めていることをはっきり告白せざるを得ない。

自分のこの今の心の昂ぶりの底には、この村研大会に結集されたような全国各地の、諸々の学術領域に亘る百名に垂んとする村落研究者が、何の心配もなく、こうした運営討論を年々せめても六回もてたなら、其処からどんなに素晴らしい業績が生み出され、日本農村近代化の導きのエネルギーに凝集することだろうかと、勿論、単に大会の頻教化のみの中から成果の輝かざるの保証を得ることは出来ないが、仮に、ここに年六回と言ったことは、大会実績における六名の発表者を念頭においての勘定である。即ち一名が午前中発表、午後同発表を両週提起とする理論的技術的討議と仮定する六日間の大会運営は、その実績的内容よりして決して空想領域に属するものではないと確信するからである。

即ち今次村研大会の具体的には一日打ちりよりする、口惜しさの感情残滓は、村研の構造並にその機能的な運営型態が具体的に、但し論理的に示してくれただけで、感懐の感情の反映に外ならなかった。私はここで特に地方新制大学の研究体制の客観的諸条件の現状に言及しようとは思わない。又それにも不拘、地方新大に要請される農村問題解決の深刻なる現実性を鑑み、機会でもないと、ただ言ひ得ること、そ

して言いたいことは、今の自分のこの口惜しさと嬉しさとのコンプレックスの現実的基礎をやはりはっきり指摘しておかねばならぬということ、そしてこの現実的基礎の打前前進のためには、どうしても村研大会において示された嬉しさの具体的構造が、それ／＼の地域において組織的に具現され、その地域々の重層的凝集の中に、謂はば、地域々々における口惜しさの組織的凝集物のみが大会にてときほぐされて行つたなら大会はより豊かな成長のための堆積となるであらうということである。

かくて村研第一回大会の教訓は、村研大会の今後のよりよき発展のためには、地方組織の連動的な充実が土台とならねばならぬということのみでなく、地方の農村研究の打前前進のためには、田畑の中から、鋤とるより素朴な、しかし同時に切実な態度を結核の基本線とした、村研構造が構成されて行くことの中に求められるということこれである。(宮崎大学)

研究室にもどつて

川越淳 二

報告にたいする真剣な討議、出席者全員をつつむファミリアな感情、仙台の第一回報告会は成功であった。本会の主旨と構成員とからすれば、それは当然のことである

う。けれども、いわゆる学会の大会が研究的なものよりも社会的なものになりつつある傾向がつよいことに、両者を兼ね備えたあの日の塚田氏は、「村研」の性格を端的に物語るものといえる。この点、直接、会の運営にあたられた各位に、深謝するとともに、われわれもまたそれを守り続けるために努力しなければならぬとおもふ。しかし、このことはあの報告会に欠点が多かつたということではない。むしろ、「村研」への期待が大きければ大きいほど、欠点が眼につくのは自然であらう。いちいちあげることには、この際できないが、總括的にいえば、共同課題に対する出席者各自の準備不足と事前連絡の不十分につきるのでないかとおもう。そのために討議の際に焦点がなかなかあわなないという結果を招いたのである。そこで次回には、この欠点を除くために、かなり困難かとも思われるが、つぎのことも提案したい。決定された共同課題について、(1)半年位前に報告者や題名を全会員に通知すること、したがって、それは前に報告希望者および題名を募集する必要がある。(2)報告決定者は、報告要旨、できれば詳細な資料を、少くとも一ヶ月位前に会費の手許に上げられるように準備すること、(3)出席者は、それを充分に検討することによつて、意向をあらかじめ用意しておく。(4)討議の際、司会者は――委員会をつくつて協議した方よりが――報告に共通な、または重要なものについて、向題

を提起する。(5)討論はそれをめぐっておこなわれる。これはいま思いついたことであるが、報告会運営における一例として、参考にして頂けると幸いとおもう。このことは研究報告が報告として用意され研究されるものでなく、共同課題は会員全部が研究するという主旨からみて当然可能であるとおもう。

これに関連して、地区研究の必要が考えられる。当日の席上、有賀先生から、支部について提案があり、はっきりした結論はでなかつたし記憶するが、反対者の意味する支部は研究会の組織としての、つまり会務運営上の、単位としての支部であり、提案者のそれは、研究単位の支部を意味していたようにうけとれたのであつて、後者の意味の、つまり近接地区に居住する会員の共同研究のための単位としての支部は、研究上——運営上ではない——有効ではないかとおもう。殊に、報告会での報告・質問・討論などについて、この研究単位が事前に打合せできるならば、一層効果的であろう。これらは会員相互の連絡で充分可能のようにおもわれる。

研究室にもどつてから、当日のことを思い出して、つくづくと考へられるのは、いままでの学者が、あまりに、自己の立場に執着して、対象に忠実でなかつたような気がする。科学が科学として成立するためには、このことは勿論必要ではあるが、しかし一方、解決すべき課題や対象がまず存在して

それに対して、有効な科学がすべて動員され、おたがいに協力することによつて、それを解決して、科学ははじめて人間のための科学となりうるのではなからうか。当面の提案としては、わがくに村落の将来に想いをほせつつ、現実の向題を解決しようとする「村落の科学」が、各専門科学の領域の向題とは別に、提唱されてもよいのではないかと云ふことである。(愛知大学)

第一回大会記事

われわれの村研第一回大会は、共同テーマ「農村改革と村落構造」に関する研究発表を中心し、約七十名、会員半数の参加という盛大さで、十月十二日東北大学農学研究所二階講堂において開催された。

◎共同研究会

共同研究会は、有賀氏の大会閉会の辞の後たゞちに、午前、井森・午後、大山両氏司会のもとに研究発表に入った。(四、以下午後)

一、岩手県大野村晴山家を中心として

木下 彰(東北大)菅野俊作(東北大)

二、岩手県雄山調査

中村吉治(東北大)島田 隆(東北大)

三、農村改革後の自作農

森住伍郎(農学専攻)

四、群馬の一山村の村落構造と農村改革

小池善吉(群馬大)

五、農村改革による社会移動について

——近畿水田村の一例——

山本 登(大阪市大)西田春彦(和歌山大)

六、農村改革と村落構造

——未墾地開墾の向題を中心として——

高倉又二(宮崎大)

◎協 議 会

研究報告終了後、直ちに協議会に入り、有賀善左衛門氏を議長に選出、次のような諸事項につき協議、決定を行った。

(一) 年報に関する件

(1) 第一輯は既定の如き内容による原稿執筆分担任で、切は十二月末。

(2) 第二輯は、この大会における報告者(社会科学会の方に発表を願つてもらつた後藤和夫、神谷力爾氏共同報告をも含む)に大会報告内容を主体として執筆を乞ふ。執筆規定細目は改めて年報委員会より連絡依頼する。

(三) 未年度宿題に関する件

農村改革の向題を今年一年でおえることは難しいから、未年度も、それに関連して課題をきめる。但し、より具体的な共同研究テーマの決定については席上、大いに討論されたが、結論を急ぐことを避けて、「研究通信」誌上で討議内容を紹介した上で賛否を問う。(別掲記事参照)

(二) 未年度大会開催地の件

東京において行うことに決定。大会当番校は東京において後にきめることとする。

(四) 会計報告の件

別掲の如き会計報告と、今年度後期及び来年度への会計上の見送しの報告があり、承認。

(五) 会費値上げの件

前項報告にもとづき、会費値上げの必要に一致。今年度中は、入会費百円、通信連絡費百円、来年度以降は入会費不要、会費年額三百円と決定。

(六) 運営機構に関する件

さきに、九州・関西方面より支部設置の要望があつたことを、事務本部委員の一人である磯長より、その点いかげすべきか紹介、討議を求めたところ、別段、制度的に「支部」を作ることはいらないと決定。しかし、地方ごとに研究本位のグループが出来るとはむしろ望ましい、という結論であつた。

(註記)この際、「研究通信No1」に既報の会則中、「D、会費及会務」の第4項に「各地方毎に支部を置く」という條項のあることを、思い出す者がなかつたので、その際、会則改正が明確に決議されなかつたが、前記の決定によつて実質的に改正がなされたものと見て、今後その條項を削除する。

また、その際、東京が「本部」で、東京以外が「支部」であるかの如き印象を与えるおそれがあつたけれども、「本部」とは、「附則」第2項に明記

されてあるように、単なる事務機関の称であつて、東京地方には東京支部が成立することが予想されたのである。

◎大会の最終プログラム 懇親会

夕食に入つてからお暫く協議会は続いたが懇談会に移るや出席者各自より、齒に衣を着せないフランクな発言が続出、第一回大会の運営についても貴重な批判が聞かれた。実はこの懇談会は更に仙台を去る列車中にまで持ち続けられたが、幸い数氏よりの投書を得て、その内容の一端を此の号に載せることが出来た。

以上のような、大会の成功は、全く開催地、東北大学所屬会費諸氏の全く行きどいた御尽力の下にはじめて見る事の出来たものであつたことを痛切に想起して報告を致します。(中野卓記)

◎大会における会計報告

創立準備以来(昭和廿七年十一月十日第一回打合せ会以来)大会開催時現在(廿八年十月八日迄)の中間報告

取入	合計	二二八三二円
借入金(無利子、無期限)		三〇〇〇円
本部委員会費(臨時) (二回)		一一二〇円
会費収入(現金払込)		一八六〇円
口座利息		一九七〇〇円
支出	合計	二〇八六二円
創立準備経費(召替及報告費)		一四二〇円
本部事務用品費		一八一五円

消耗品費

口座開設費	一六〇円
郵便A(研究通信編集連絡及発送関係)	五九八〇円
B(その他の連絡用)	二〇二二円
研究通信印刷費	一五八五円
名送作成費	二五〇〇円
差引残高	一九七〇円

◎参考事項

(1) No156迄の「研究通信」発送費用に就て

平均一号当り	一〇七番	九六六円	三三〇円
最近No6では	三三〇円	二二〇円	三三〇円

(2) No6現在の発送先
次号発送予想数 一四三名
通信連絡費払込者数 一五七名
九二名

◎大会特別会計
村研第一回大会特別会計に關し、竹内利美氏より、次のような御報告があつた。

「大会収支は次のようです。丁度トントンです。これから御覧下さい。これは全く中村吉治氏の御尽力の賜と申してもよろしく、その範囲内で討議致しました故、次回の参考には余りならぬかと存じます」

取入	大会参加費徴収額(六七人、昼食費、名簿代)	三三五〇円
	(に充当。各人より五〇円迄)	三三五〇円
	懇親会費徴収額(四三人、各人より三五〇円迄)	一〇七五〇円
	特別寄附金(※)	八〇〇〇円
取入計		二二一〇〇円

安河内 博氏逝去

本会委員、大分大学助教安河内博氏は九月廿四日、御病氣のため死去された。凶書紹介欄にある「対馬藩に於ける奴婢制成立の研究」は、はからずも遺著となつたものである。同氏は本会の当初よりの熱心な会員であり、同僚として痛惜に耐えない。同氏は対馬研究に於いて新庄面を開いたと

(九州史学叢書) 大分大学助教 安河内 博 遺著

『対馬藩に於ける奴婢制成立の研究』

対馬藩の奴婢制はわが国封建体制中、他に例のない制度であり、その源流は遠く中世にさかのぼり、その終末は、明治初年に及んだ。而もその地西辺に偏在するため、従来僅かに二、三の者の注目をひいたにすぎなかつたが、著者は従年来この問題ととりくみ、数度にわたつて各学界にその調査研究の結果を発表し、これが解明と紹介につとめたが今回、従來の得たところをまとめて一書とした。著者はこの書を出発として、次の問題に着手したのであつたが、本年九月廿四日病のため急死され、本書が前途を期待された同氏の遺著となつたことは、まことに惜しみても余りある次第である。こゝに本書の内容を抄録して、大方におすゝめ致す所以である。

目次

- 第一章 対馬藩に於ける奴婢制成立の由来
 - 第一節 寛永一寛文期の拝領下人 第二節 室町時代に於ける対馬の下人 第三節 再び寛永一寛文期の拝領下人について
- 第二章 対馬藩に於ける奴婢制の成立
 - 第一節 寛文の改革と知行関係 第二節 寛文一延宝期の拝領下人 第三節 奴婢制の成立過程 第四節 奴婢制の確立整備の機運

云つて良い。対馬藩の奴婢制は日本封建社会の中で特異な制度であるが、これは却つて日本封建社会の理解の爲に重要な位置を占めるものと云つて良い。安河内氏はこれを広い視野において社会的に追求しておられるので、凶書紹介欄の同氏遺著は、単に歴史学者のみならず、社会学者、法学者、経済学者その他の人々にとつても有益であると信ずる。出来るだけ多くの人から読んで頂きたいと思ひ、敢ておすゝめする。

第三章 (略)

第四章 対馬藩奴婢制の本質

- 附 表 下人・科人概成下一覧、一人の売口買口一公事免状一覽表、室町時代に於ける対馬の人身売買者分布表、元禄期の買奉公人一覧 (A6 二〇一頁)
- 頒布取扱所 福岡市博多 九州大学文学部国史研究室 実費領価一五〇円郵税二〇円
- 振替口座 福岡一七九一九番

支出

- 懇親会入費 一六二八二
- 昼食入費 二六二五
- 名袋代(六七部分村券合計代札) 一〇〇五
- 会場係員謝金 一五〇〇
- 雑費 六九〇
- 支出計 一二一〇〇
- 差引残額 〇

◎会費に關するお知らせ
別記大会報告記事にあるように

昭和廿九年度分より(廿九年四月以降)

- ・入会費 不 要
- ・会 費 年額三百円

但し、今年度会費は、今後払込まれるものといふことも従來の規定による。(即ち入会費百円、通信連絡費百円)

- ・払込み先は従來通り
 - ・振替口座 東京形参八八六番
- 村落社会研究会

◎会員名簿実費頒布
昭和二十八年十月一日現在

村落社会研究会会員名簿

大会参加者には既に大会参加費に含めて実費十五円で御渡し致しましたが、参加されなかつた会員の方々に、送料(封筒代・切手代)とも実費八四切手四枚を封入の上本部まで申込まれれば、直ちに郵送致します。